「個別の指導計画」に基づく授業づくりのあり方

企画者　岡部　盛篤（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
司会者　西垣　昌欣（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
話題提供者　田村　裕子（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
杉林　寛仁（筑波大学附属桐が丘特別支援学校）
指定討論者　川間　健之介（筑波大学人間系）

KEY WORDS:　個別の指導計画　授業づくり　桐が丘Ｌ字型構造

【企画趣旨】

共生社会の形成に向けて，障害者の権利に関する条約に基づいたインクルーシブ教育システムの構築が進められる中，障害のある子どもの自立と社会参加を目指し，一人一人の教育的ニーズに応じた指導の充実のために個別の指導計画の運用は欠かせないものになっている。

しかし，個別の指導計画からどのように授業づくりをしていくのかは依然として十分には明確にされてはおらず，授業に個別の指導計画が生かされていないという指摘がある。

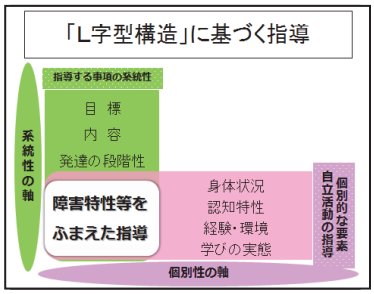
こうした現状の要因としては，様々なことが考えられるが，個別の指導計画がシステムとして理解がされず，うまく運用されていないことが大きな要因と推察される。

本シンポジウムでは，この点に着目し，筑波大学附属桐が丘特別支援学校（以下当校）の個別の指導計画のシステムを例に話題提供し，個別の指導計画に基づく授業づくりのあり方について議論を深めたい。（岡部　盛篤）

【話題提供者の要旨】

(1)　「L 字型構造」に基づく指導

当校では，授業の目標・内容に則した系統性の軸と児童生徒の個別性の２点に基づいたＬ字型構造で授業を行っており，個別の指導計画はベースとなるものである。個別の指導計画で共有されたことを各授業の目標に則して生かし，手だて配慮として設定していくこととなる。

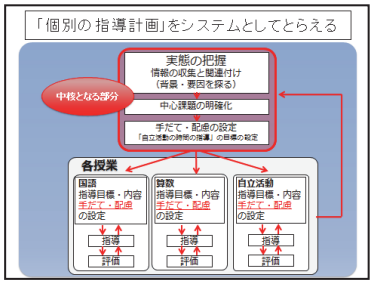


本シンポジウムでは，この点をふまえ，個別の指導計画がどのように授業に生きているかについて当校の実践例を紹介して，議論を深めたい。（杉林寛仁）

(2)　個別の指導計画をシステムととらえる

当校では，個別の指導計画について以下の４つのことを重視して運用を行っている。

1. 個別の指導計画を完成させるべき書類ではなく，情報の流れ，システムとしてとらえるということ。
2. 個別の指導計画のすべてを子どもに関わる全教員でおさえるということではなく，個別の指導計画の中で，共有して，おさえるべき大切な所はどこか，ということを明確にしたうえで，情報の共有を図ること。当校では，関わる教員がおさえるべき，大切な情報を「中核となる部分」と呼んでおり，具体的には「個々の児童生徒の実態」「中心課題（指導の方向性）」「手だて配慮」「自立活動の時間の指導目標」の４点があげられる。
3. 共有した情報（中核となる部分）を，各授業者がどのようにしていく具体化していくのかということ。
4. 各授業者が振り返りを行った上で，どのように複数の教員で情報を共有，再共有していくのかということ。

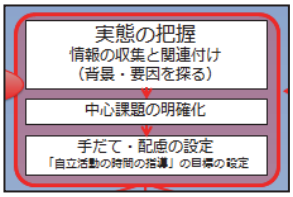


これらをふまえた上で，個別の指導計画を授業で生かすには，個別の指導計画をシステムとすることが必要である。

具体的には，中核となる部分を関わる教員間で共有し，共有したものを，各授業で具体化し，検証する。そして，手だて配慮を中心として具体化したものを評価し，コアとなる部分に返すサイクルを繰り返していくことが個別の指導計画をシステムとして運用することとなる。（田村裕子）

(3)　共有すること

何を，どのように，いつ共有していくのかについて説明する。共有すべきは中核となる部分については，先述の通りだが，これらを右図に示すステップで共有していく。特に実態把握はカード整理法を用いて実態・課題関連図作成を行っている。これは，様々な視点の共有が可能なことと，個別の指導計画を運用し仮説を検証していく上で修正すべき点（背景・要因）が明確になりやすいという利点がある。



さらに，中心課題（指導の方向性）を明確にしていくことで，手だて・配慮との混同を避けることができる。

中核の部分は５人程度のグループで作成し共有する。これら共有したものを学部でさらに共有し先述の PDCA サイクル（学期に１回）で個別の指導計画の運用を行う。一方で，授業等で児童生徒の日々の変化などをとらえ，個別の指導計画に反映させていくことも重要でこちらは先述のサイクルよりも短い間隔で行うことになる。これらの短いサイクルも中核の部分を作成したグループが中心となって行い，仮説を検証していくことになる。（田村裕子，杉林寛仁）

【指定討論者の要旨】

個別の指導計画とはどのようなものかという原点に立ち返り，個別の指導計画が授業でどのように生かされているのか，どうすれば指導者自身が個別の指導計画を授業で生きていると感じられるようになるのかについて考えを深めていきたい。（川間健之介）

（OKABE Moriatsu, NISHIGAKI Masayoshi, TAMURA Yuko, SUGIBAYASHI Hirohito, KAWAMA Kennosuke）